

二〇二三年度

一般公募推薦入学試験

【適性検査】

「国語」問題

1. 問題および解答用紙は試験開始の合図があるまで開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入してください。
3. 受験番号および氏名は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 試験終了後、解答用紙を問題の上にふせて置いてください。
5. 回収するのは解答用紙だけです。問題は持ち帰ってください。
6. 「国語」の問題は1ページから6ページまでです。

1 次の文章を読んで後の設問に答えなさい。

(1) 音楽は聴くものであると同時に、読んで理解するものである。そして音楽を正しく読むためには、「学習」が必要となってくる。文法規則を知り、単語を覚えなければならぬ。音楽には語学と同じように学習が必要な面がある——これが意味するところはつまり、「音楽にも国境はある」ということにほかならない。サウンドとしての音楽は国境を越えるだろう。甘い囁きや苦悶の絶叫は、細かい意味内容を知らずとも、万人に理解出来る。だが言語としての音楽は、文法と単語をある程度知らなければ、決して踏み込んだ理解は出来ない。例えば記号的な音の使い方は西洋音楽に限ったことではなく、中国の京劇だとか日本の歌舞伎や近世邦楽にも無数に例があるはずだが、私にはそうした知識がない。だからいつまで経ってもそれらを「サウンド」としてしか聴くことが出来ない。理解が深まっていかない。国境の壁（邦楽に国境の壁を感じるというのも変な話だが、近代の日本人にとって ① ということだろう）を越えることが出来ないのである。

確かに文学の場合、国境によって囲い込まれてしまう傾向は、音楽よりさらに強いのかもしれない。音声的にまったく異なる言語体系に移し変えられてしまうと、響きと意味とイメージがないまぜになった言葉の体感のようなものが、決定的に失われてしまうわけだから。そこへ行くと音楽は、少なくともそのサウンドでもって、直接すべての人々に訴えかけている幻影を演出することは出来る。文学と比べれば音楽は、「ある程度は」国境を越えている。それでもなお、音楽にもまた「語学の壁」が存在していることは、右に見た通りである。

にもかかわらず、それでは一体なぜか頻繁に「音楽は国境を越えた言葉だ」という表現を人が口にするのかと考えたとき、これと密接に関わっていたと想像されるのが、「音楽は語れない」のイデオロギーである。音楽は言語では語れないサウンドだからこそ、国境を越えて誰にでも直接訴えるのだ。もし音楽がそれ自体言語であるなら、人はそれを理解するために学ばねばならない。それでは分かる人と分からない人が選別されてしまう。「音楽は語れない」と「音楽は国境を越えた言葉だ」は、ともに音楽の言語性格の否定であるという点で、根は同じなのである。音楽は誰にでも分からなくてはならないという呪縛である。

「音楽は国境を越えた言葉だ」という言い方がいつ生まれてきたものなのか、寡聞にして私は知らない。だが「語れない」というイデオロギーと同じく、それが一九世紀の産物であることは、まず間違いないだろう。そもそも近代的な意味での国境の概念が生まれてきたのが、まさにこの頃なのである。一九世紀は国民国家の時代であった。言語と民族と歴史を共有する「国民」が一つの独立国家を形成するという考え方は、この時代に初めて誕

生した。一九世紀になって初めて、民族／言語が国家の統一単位（イタリア語、ドイツ語、ポーランド語、チェコ語等々）だと考える人が出て来たのである。

だが同時に民族独立運動の一九世紀は、人々が全人類のユウワの夢を見始めた時代でもある。かつての教会や国王のような、超国境的な統治者がいなくなった世界に、いかにして再び統一を与えるか？ こうした状況の中で特別な使命を与えられたのが、音楽ではなかったか。つまり、言語が世界を構成する「国家／国民」という単位にアイデンティティーを与えたとすれば、言語による分割を再び無効にして、感動の坩堝くわぼの中で世界を再統一するのが音楽というわけである。「いざ抱き合え、幾百万の人々よ！」——ベートーヴェンの《第九》が描いたのは、まさにこうしたユートピアであったと、私には思える。

もう少しがった言い方をするなら、音楽は自国中心文化のグローバル化を図るための、格好の手段であったとも考えられよう。周知のように一九世紀になると、数多くの民族が独立した国家を作ると同時に、自分たちの国民アイデンティティーとしての音楽を持つことを熱望するようになる。ウェーバーやヴェルディやシヨパンといった、国民楽派の作曲家たちは、こうした背景から登場してきた。そして国民音楽は民族を結集させるアイデンティティーの核であると同時に、その民族文化を国境を越えて普遍化する役割を与えられていた。それに最も成功したのはドイツであったわけだが、自国の音楽を世界基準として流通させる際の標語が、「音楽は言葉ではない／国境を越えている」だった可能性は、それが潜在意識的なものであったとしても、かなり高いはずだ。本当はその文化に精通しなければ理解のかなわぬ「言語」であるかもしれない音楽を、自国の中心性は隠したまま、「国境を越えている」と言い立てて世界に広めるわけである。

例えばシヨパンの音楽を「ポーランドの魂」と呼び、それがポーランド人以外には理解不能であることを言外に匂わせつつ、それを「国境を越えた言葉」と信じる日本人や中国人やアルゼンチン人に弾かせ、そして「世界言語としてのシヨパンの音楽」の中心地であるワルシャワのシヨパン・コンクールへとモウ(c)でさせるといったからくりには、「国境を越えた音楽」イデオロギーの二重性が端的に現れているように思う。

（岡田暁生『音楽の聴き方』による）

問1 〓線部(a)～(c)の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。

問2 〓線部(1)「音楽は聴くものであると同時に、読んで理解するもの」とありますが、次のように言い換えました。次の空欄にあてはまる語句を本文中から抜き出しなさい。

音楽は であると同時に でもある。

問3 空欄 にあてはまる文として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 邦楽は外国語のようになっていく
- イ 邦楽に使用される楽器を知らない
- ウ 邦楽の演奏風景を直接見たことがない
- エ 邦楽が違和感のある音階で出来ている

問4 〓線部(2)「それが一九世紀の産物であることは、まず間違いなからう」とありますが、なぜそのように言えるのか、次のように説明しました。次の空欄にあてはまる語句を本文中から抜き出しなさい。

一九世紀までは、 のような統治者が領土を治めており、その統治の範囲は近代的な国境とは異なるものだった。しかし、一九世紀以降、 を同じくする人々を「国民」と考えるようになり、「国家」という が誕生したのである。このように、言語が人々を統一することは、同時に するということでもある。それによって一九世紀になってから初めて「越える」べき「国境」という概念が生まれたと言えるのである。

問5 ———線部(3)「音楽は自国中心文化のグローバル化を図るための、格好の手段であった」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 音楽は言葉を使うことなく人を興奮させることが出来るために、民族の団結力を高めることが容易だということ

イ 言語性を見逃されがちな音楽の言語性を見直すことが、自国の文化ひいては他国の文化をも見直すことにつながるということ

ウ 自分たちが昔から脈々と受け継いできた音楽と、他の民族の持つ音楽の統一こそが世界を一つにする効果的な方法だということ

エ 音楽は国民のアイデンティティーを確立する手段となる一方で、言語理解が不要だと思われるがゆえに他国にも浸透しやすいということ

問6 ———線部(4)「からくり」とありますが、筆者がシヨパン・コンクールを「からくり」と呼ぶのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ポーランド人はシヨパンの音楽を「ポーランドの魂」と呼び、国民としてのアイデンティティーを堅固なものにしたと思っていたが、シヨパン・コンクールによって他国にも門戸を開いてしまったから

イ シヨパンを弾く日本人たちは、ポーランド文化を理解出来ない自分たちにもシヨパンの音楽が理解出来るつもりでシヨパン・コンクールに参加するが、結局ポーランド中心主義に荷担させられているにすぎないから

ウ シヨパン・コンクールという国際的な場で演奏されるシヨパンの音楽は「国境を越えている」ことを証明するかのようになっているが、ワルシャワに集まった世界中のピアニストに画一的な演奏を求めることになるから

エ ポーランドで生まれ、フランスで活躍したシヨパンの曲を、アルゼンチン人や中国人に弾かせることで、シヨパンの音楽がどのような言語体系を持つ世界でも通用するかのように見せながら、実際はシヨパン・コンクールではポーランド人が優遇されるから

2 次の文章は江戸時代の『野乃舎随筆』の一節です。本文を読んで後の設問に答えな
なす。

ある仏者^{※1}言ふ。地獄にて鬼ども罪人を責めけるに、この罪人いと怖き者にて、娑婆^{※2}にて
犯せし罪咎^{つみとが}をただちに言はざりければ、鬼ども責めあぐみて、しばらく拷問⁽¹⁾を休みるたり
けるに、罪人鬼どもの面^{おもて}をつくづくと見て言ふやう、「我は娑婆にて罪ありしによりて、
この地獄へ墮ちたるはもつとも理^{ことわり}なれど、足下^{※3}たちはいかなる罪の深きによりてかくこ
こにはものし給ふぞ、⁽²⁾いとよいぶかしきこと」と言ひければ、赤鬼青鬼涙をはらはらと
流して、「おのれらはぬしの子なり」と答ふ。罪人いよいよいぶかりて、「我は娑婆にて子
持たずして失せたり。さるを我が子と言ふはいかなるゆゑにか」と言ひければ、「知らせ
給はぬこそいとほしけれ。ぬしのはじめて罪犯し給へりし時、一つの鬼の首出^{かど}で来
ぬ。その後罪おかし給へりし時^{※6}むくろ出で来ぬ。また罪作り給へりし時、手足出で来て、
一匹・二匹の鬼となりしぞかし。その後たびたび罪犯し給へりし時、三匹・四匹と大勢に
なりぬ。皆ぬしの罪より生まれし子どもなり」と言ひて、鬼ども足ずりをしつよよよ
と泣きたるとぞ。

※1 仏者…僧侶

※2 娑婆…人間が現実に住んでいるこの世界・現世

※3 足下…あなた

※4 ものし給ふ…いらっしゃる（お生まれになる）

※5 いとほし…ふびんだ。気の毒だ。

※6 むくろ…胴体

問1 — 線部(1)「拷問を休みゐたりけるに」とありますが、どうして拷問の手を休めたのですか、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 拷問が長時間に及んだから
- イ 罪人が気の毒だと思ったから
- ウ 罪人がなかなか罪状を白状しなかったから
- エ この罪人はもともと自分たちの親だと気づいたから

問2 — 線部(2)「いといといぶかしきこと」とありますが、何をいぶかしく感じているのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 拷問が続くと思っていたのに、どうして鬼たちはその手を止めたのかということ
- イ 拷問しているのは鬼なのに、どうしてその鬼が泣きながら拷問しているのかということ
- ウ 自分が犯した罪よりも、鬼の方が罪深いのにどうして鬼は責められないのかということ
- エ 自分は罪を犯して地獄にいるが、この鬼たちはどんな理由があつて地獄にいるのかということ

問3 — 線部(3)「おのれら」・(4)「ぬし」とありますが、具体的に誰のことを指しますか。それぞれ本文中の語句で答えなさい。

問4 次のア～エのうち本文の内容と合致しないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 罪人は現世では子供を授かることはなかった。
- イ 現世で人が罪を犯すと地獄で鬼が少しづつできあがつていく。
- ウ 罪人は鬼たちの告白を聞いて衝撃のあまり泣きだした。
- エ 地獄で責め苦を受けていた罪人は自分の子供たちから拷問を受けていたことにな

(以下余白)

